

## No.86 フランシスコ・インファンテ —無題—

Francisco Infante

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年3月1日付 立川市市報記事より

フランシスコ・インファンテは、ロシアの作家である。名でわかる通り両親はスペイン人で、スペイン市民戦争で共和国側が負けて、ロシアに両親が逃れてそこで生まれたのだが、1歳の時に父親が亡くなったそうだ。

それからの激動は想像にあまりあるが、そのなかで彼はアルテファクトという自然と科学の融合を目的とした前衛的な仕事をしてきた。それは風景を操作によって異なったものに見せるやり方だ。

ここでは有田で焼いた陶板が、斜めになった鏡面のステンレスに映って見えるという作品を機械搬入口に作った。実が虚であり、虚が実であるという、今までの仕事の延長線上にある美しい作品である。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

ある状況の内側にいると、その時抱いた感覚の正体を見ることは不可能のように思われます。おそらくこれは、あなた自身とは、あなたの外の意識に反映され、そこから見られた姿であるという法則によるものなのでしょう。

これはあなたの意識、あるいはあなたのものではない、あなたの外にある他者の意識であるという事ができます。言い換えるとあなたという人間は、意識の外の鏡がとらえたものなのです。あるいは、“活人画”を定義する際重要なのは、反映もしくは反射であります。

このような反射のメタファーを、私は立川プロジェクトの為の作品として提案したいと思っています。

色彩による構造物—それはつかの間、私という個人の心を占めたわけですが(この場合は“サインをつくる”という1984年のシリーズのバリエーションです)—は水平に地上に置かれており、草があるため外からは見えません。しかしその前に垂直に置かれた鏡に反射して、色彩豊かな表面が見えるようになっています。

さらに見る位置によって、反射される像は変化します。つまり反射によって毎瞬毎瞬、客観的現実の像が変わるのです。

立川プロジェクトはアーティストが作品を設置するための適切な手段を提供しています。ここで使われるのは、ギャラリーや美術館の展覧会における限られたスペースではなく、開かれた都市空間なのです。